親がいない

源しゅんと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
親がいない

【Ｎコード】
Ｎ１４６０Ｒ

【作者名】
源しゅんと

【あらすじ】
親が突然姿を消した。主人公はそんな親を追って、親の追求をはじめる。はたして、親は無事か？

第一章（前書き）

なんとかセカンドデビュー！前回と同じような、話にはしないよう心がけます。

第一章

「おはよー。お母さん」
眠気眼で起きた、今野和弘。中学二年の彼は、顔を洗って、リビングに入った。
「シィィィン」
暗い。いつもなら、母親が朝食の準備をしている時間だというのに、リビングには誰一人としていなかった。和弘は電気をつけた。すると、いつも食事をしていた、テーブルに書き置きが残されていた。

和弘、香織へ
突然でごめん。本当にごめん。私たちは親失格だわ。
和弘、妹をよろしく。
香織、お兄ちゃんの言うことをちゃんと聞きなさい。
お母さんとお父さんを、探さないで。
父、母より

「……？」
和弘には理解が出来なかった。
（探さないで？どっかに逃げたのか？え？嘘だ。何で？）
父と母が、この家から逃げた。ただその事実が、和弘の、わずか十四歳の心に深く突き刺さった。
「あれれぇ？おにーちゃん、ママは？」
香織が目を覚ました。和弘は適当に誤魔化した。パパとママは用事でしばらく家に帰らないと。この家は、共働きだった。そのため、帰りが遅く、和弘が食事を作ることも、珍しくはなかった。そのため、朝食も簡単に作り、香織を幼稚園に送り出した。
中学校は家からは近い場所にある。そのため、すぐに学校についた。
「和弘〜。おはよーっす」

仲の良い友達の翔。
「和弘。おはよ」
幼馴染みの由希。どこにでもいる、普通の友達関係。
「ねぇ、見た見た？昨日のテレビ、面白かったね」
「だよなぁ。俺さずっと寝るまで思いだし笑いしてたよ」
二人が談笑しているなかで、和弘はかなりテンションが低かった。
「どうした？和弘？」
翔は尋ねた。しかし、和弘は答えなかった。
「ねぇねぇ、どうしたの？何かあった？」
「分かった！香織ちゃんに何か言われたんだろ！」
「そんなんじゃねーよ！」
大声で叫んだ。
「？？」
二人ともなぜ怒られたか分からない。
「ねぇ、和弘。本当に、何かあったの？私たち、相談に乗るわよ？」
由希は優しくそう言った。和弘は、それが女神に見えた。
「あぁ、放課後にでもな。まだ俺だって、よく分からねぇんだ」

第二章

放課後。和弘は翔と由希を連れ出し、家に帰ってきた。
「おじゃましまーす」
何も音がしない、その家に入った。
「あれ？お母さんたち、いないじゃん？」
「うん…」
和弘は小さく答えた。
和弘たちは、無言のまま座り尽くしていた。翔や由希も、どう言えばいいのか分からない。すぐに帰ってくるよ。そんな言葉で終わらせれば、和弘はとても傷つくだろう。それを由希たちは分かっていた。
「なんか、わりぃな。こんな空気になっちまって」
和弘が頭を掻いた。
「いや。そんなことはないよ。だって、和弘、そんな思いでいたなんて」
「悪かったな。つまんねぇ冗談言って」
由希も翔も、どう言っていいか分からず、ただそう言った。再び、沈黙が漂った。
始めに重い口を開けたのは、由希だった。
「決めた！私、これから、和弘を支えてあげる。何かの手助けをしてあげる」
由希の目は本気だった。そこには、断る余地さえ与えないという、気迫さえ感じられた。
「俺も。何かしたい！お前の親を探すのを手伝ってやるよ！」
翔も本気だ。断るなんて、二人の信頼を断ち切るのと一緒だ。和弘は協力してもらうことにした。
次の日から、新たな生活が始まった。
「おはよ。まだ寝てるの？香織ちゃんより寝坊してる」

朝は由希が家にやって来る。家事などを手伝ってくれるのだ。それを由希にお願いしたのは、理由があった。香織は女の子だ。女の子にしか分からないことも、多いはずだ。そのために、由希にしたのだ。そして由希を幼稚園に送り出し、中学校に行く。そこで翔に進展を聞く。そして家に帰って、由希と一緒に家事。夜にやっと宿題ができる。一日休む間もない。

「はぁ。これがお母さんが味わってた、大変さなのかぁ」

和弘はつくづく感じた。そのなかで、唯一元気なのが、香織だった。

「ママ、いつ帰って来るかなぁ？」

和弘は、適当に受け答えしながら、家事のあとの食事を頬張っていた。

「ん。意外とおいしいじゃん」

由希と一緒に。

「ってか、なんでお前まで一緒に食ってんだよ！」

「えぇーーっ！それぐらい良いじゃん！うぐっ。えぐっ」

由希は涙を流した。

「うぐっ。か、和弘の、ケチ～。うわぁぁぁぁん」

「なっ、何も泣くことないだろ！」

「あぁ！お兄ちゃん、泣かした～」

香織にまでここまで言われた。

「もう！分かったよ！良いから食え！まったく！」

「え？いいの？」

「……」

うそ泣きだった。

一日経っても、二日経っても、親は見つからなかった。

「借金抱えたりはしてねぇんだろ？」

「ああ。そんな様子、一切見せなかったぞ」

「だったら、もっと他の線で考えてみるか」

翔はメモ取りをして、考えた。翔の交遊関係は、幅広いからだ。

（はっきり言って、時々怖いときがあるからな）

かなりの情報通なのだ。
いつも和弘は、由希と一緒に帰っている。由希も和弘も、部活は入っていない。そのため、結構早い時間に帰ってこられた。
「和弘～。家の掃除もちゃんとしないと～」
そして、たまに由希がやって来て、ちょっかいを出しにくる。これが一週間続いた。

第三章

「おい！大ニュースだぞ！」
部活を終えた、翔が家に飛び込んできた。
「おい。どうしたんだ？」
和弘も由希も首を傾げて聞いた。
「聞いて驚くな？実は、和弘の父さんと、母さんを見た人がいたんだってさ！」
和弘は目を大きく見開いた。まさか、見た人がいたなんて。
「それでな。他にもいろんなことを聞けたぜ」
翔は机に座り、話をし始めた。
父、母がいたのは、ここより若干遠い、あるビルらしかった。そのビルは、あまり人が入らないビルで、噂では殺人鬼がいるだの、異次元の扉だの、幽霊の溜まり場だの。様々な都市伝説がある場所だった。
「ちょっと待てよ。なんで父さんらはそんな物騒なところに行ったんだ？」
「まぁ、待てって」
しかし、数分後、同じビルから会社の社長らしき人が、そこから出てきたらしい。
「どういうことだ？」
「ビルに和弘の父さんと母さん。そして、社長がいたの？だからなんなの？」
「えぇっと、それは…」
翔もそこまでは考えてなかったようだ。
「もしかして、あのビルで話し合いをしていたんじゃないか？」
「そんな古びたビルで？」
「ただ偶然に出会っただけで、本当はなんの繋がりもないんじゃないの？」

様々な意見が飛び交ったが、しっくりくるものは、なに一つとして、出てこなかった。
「じゃあとりあえず、そのビルの管理人と、今までの使い道を調べてくれ」
「わ、分かった」
翔には、新しい仕事が与えられた。
「俺たちは、一回そのビルの場所に、行って見ようぜ」
和弘と由希、そして香織は、ビルに行って見ることにした。
そのビルは、古かった。全体が灰色のコンクリート制で、所々ヒビが入っていた。周りには少しの庭があったが、雑草が大量に生えていた。その長さは一メートルを簡単に越える長さだった。
「はぁ。これなら都市伝説の一つや二つはあってもおかしくはなさそうだけど」
その建物は、異常に不気味で、非常に恐怖を感じた。だが、中に入らないことには、全て始まらない。勇気を振り絞り、和弘たちは中に入った。
中はとても薄暗く、足音が響き渡った。香織も由希もがたがたと震えていた。
「こっここ、怖くなんか、ななな、ないもの。ねっね、香織ちゃん」
「う、うん」
和弘だって怖い。この変な薄暗さは、気味が悪かった。やはり、ただ何もなく、暗く怖いという理由で意味の分からない、都市伝説が起こったのか。真相は分からないが、二人にこれ以上、怖い思いをさせることは出来ないため、引き返して、家に帰ることにした。

第四章

「すまん。それは知らねぇわ」
「ふぅん。分かった」
翔はよくいくコンビニで、他の人と談笑をしていた。
「へぇ。お前でも知らねぇことがあるんだなぁ」
「まぁな。今回ばかりはお手上げだぜ」
話していたテーマは、あの「ビル」に関する情報。都市伝説でも、ニュースでも何でもよかったが、あまりはっきりした噂話はなかった。言えることは、縁起でもないことばかりだということ。「～したら呪われる」という、定番のものしかなかった。さすがの翔の情報網でも、あまりつかめなかい、やっかいな問題だった。
「そーいや、何でそんなもん調べてんだ？」
聞かれて当然の、何でもない質問をぶつけられた。しかし、あくまでもまだ仮の話。実のところ、本当にあのビルに、和弘の親がいたのかも曖昧なのだ。それなのに、話しても仕方がない。
「いや。大したことはないんだ。少し友達のことでね」
「ふぅん。そのメモに書いていってるのか」
一応、聞いたことはメモに書いてある。それを指差して言った。
「その今野って子のことか？」
名前が書いてあるのを見て、そう気づいたのだろう。
「ま、まぁ、そうだな」
翔は情報を集めるときに、情報源や情報を欲しがってる人の名前を出したりはしない。しかし、今回は出してしまった。
「あれれ？『今野』って名前、どっかで聞いたことがあるような？」
すると、その人がコンビニに置いてある、新聞紙に向かった。何枚か探すうちに、
「あぁ、あったあった、これだ」
一枚の新聞紙を取り出した。

「それがどうかしたのか？」
「ここをよく読めって」
指差されたのは、小さなスペースに書かれた文字。
今日で五人目。犯人は地元の今野氏か

それはある殺人事件のものだった。昔、連続殺人事件が話題を呼んだ。地元の人間が、次々と消息を絶ってしまった。そして、その人たちの恨みを抱えている人から割り出し、今野家が疑われた。実に十四年前のこと。そして、五人目についに有力手がかりを見つけた。五人目の殺害に使われた、縄が見つかった。その縄には今野家の指紋がついていた。今野が犯人だと警察も疑わず、捜索が始まった。十四年も経った今、その事件はすでに人々の記憶からは消えていた。
「ねぇ。なんでそんな昔の記事持ってんの？」
「あぁ。なぜなら、この『五人目』ってのが、俺の父さんだからな」
「そうだったんだ…悪いな、暗いこと思いださせっちまって」
しばらく静かになった。
「よし。まぁ、ありがとな。また、情報交換よろしく」
彼は手を振って見送った。
翔は和弘にそれを見せた。
「う～ん。記憶の片隅にもないよ。だって、十四年前だろ？生まれてきた年じゃん。分かんねぇよ」
「まぁ。そりゃそうか」
翔は頭を掻きながら言った。
「でも。和弘が預けられて、父さんと母さんだけでどこか用事に行くことはなかった？」
翔にこんな質問をされた。和弘の体はピクンと動き、固まってしまった。
そういえば…一度…
時は十年前に遡る。

第五章

十年前。和弘は幼稚園に通う、普通の子供だった。しかし、ある夜にそれが引き裂かれた。

「警察だ。そこを動くな！」

入ったのは三人の警官。

「私たちは見た通り、警察よ。あなたたちの逮捕状が出ているわ」

銃を向けて、そう言った。父と母は、仕方なく手を挙げた。和弘はどうしたらよいか、全く分からなくなり、わんわんと泣きわめいた。父母は連れていかれ、残った和弘は、一人悲しく立ちすくんで泣いた。やがて、祖母がやって来て、和弘を引き取った。

しばらくして、父と母は帰ってきたが、家には辛い世間の目があった。どれだけいい子でいても、関わるととんでもない目にあう、と言われ、友達とは次々と引き裂かれた。今思うと、あれは父母のせいだったのか。現実に残されたのは、謎に包まれた、育児放棄だった。暗くどす黒い気持ちが、和弘を襲った。

「父さんと母さんは、無実なのに、俺たちが引き裂かれている理由はなんだ？今どうして、家出をしたんだ？」

「分からない。でも、これだけは言える。お前がしっかりと支えてやらなきゃならないことだ。あの家も、そして、香織ちゃんを」

どす黒い気持ちはやがて、香織を守るためのやさしい気持ちに変わった。今、決意した。なんとしても、香織を立派な大人にする。父や母は、なんとかして見つける。それが今の最善策だということを。交番や区役所へ行って、なんとか親の所在を確認しようと試みたが、ほとんど進展が見られなかった。分かったのは、未だに給料が振り込まれていて、仕事をやめてはいないということ。また、あのビルに入ったのを見た人物が他にも数名いて、なぜか封筒を手にしていたらしい。

「封筒はいったい、なんのために使ってたんだろう？」

和弘は翔に問いかけた。
「さぁ？全く検討がつかねぇ」
「俺、もう一度、明日区役所にいってみるよ。」
和弘は次の日に区役所に出かけた。
「えぇ～っと、今野さんは、あぁっ。そういやぁ」
取り出したのは、戸籍表。そして、
「ああっ。あった、あった」
この人は親切な人で、僕に結構いろんなことを教えてくれる。いい親戚だ。
「十年前に、御親戚の方が亡くなってるね。まぁ、俺の親戚でもあるんだけどね」
名前を見ると、今野茂明と書かれていた。再び、過去を回想して思い出してみた。
今野家は年に二回、祖父母の家に集まる。大抵、どこの家でもそうだろう。そこで、従兄弟や又従兄弟、叔父さんや、叔母さん。かなり遠い親戚まで、数多くの人が集まった。その中にいた人物……
「あぁっ！」
思い出した興奮で、叫んでしまった。すぐに注意され、静かにまた回想に入った。
そういえば、この人は、父の従兄弟の従兄弟の親で、かなり遠い関係だ。しかし、あの日のことは、一切忘れない。
「はい。今日は君の誕生日だったね。プレゼントだよ」
誕生日のプレゼントをくれた、遠い伯父さん。その記憶を鮮明に思い出そうとした。そういえば、彼はいつも泣きながら、　お金を貰っていた。お金がなく、借金もしているらしかった。
「ごめんな。ごめんな」
いつも謝っていた。
彼の死亡要因は、自殺となっていた。なぜ自殺をしたのだろうか。
なにか、深いわけがあるような気がした。
家に帰って、翔が香織の世話をしていた。

「おい、翔。悪いけど、少し動いてもらえないか？」
「ん？どうかしたか？」
「今野茂明って言う人を調べてくれないか？」
「え？誰それ？」
「まっ。調べたら分かるさ」
翔は首を傾げ、
「お前、どこに向かってるんだ？大丈夫か？」
翔には、どうしても、親探しとは思えない。だが、一応やってみよう。思わぬ掘り出し物が見つかるかも知れない。
三日後、翔は自分の手にした情報を、全て和弘に話した。
「今野茂明。１９５１年生まれ。十年前、自殺により死亡。仕事はバスの運転手。賭け事好きであったため、お金がなく、サラ金に手を出し、自己破産。運転手の仕事をやめ、しばらく無職で、アルバイトばかりの日々を送ったが、突然の夜逃げ。一年間逃げたが、ある日に森で、亡くなっているのを地元の人が発見した。これだけだけど？」
翔はこれだけのことを調べた。
「ありがとう。これではっきりした」
「え？なにを？」
由希は間に入って言った。
「間違いなく、今野家は裏社会に関わってしまっている」
「あぁ。サラ金に借りたのだから、恐らく、暴力団が関わるはずだ」
「こりゃ。ただの自殺じゃすまないかもな」
和弘は刑事のように言った。しかし、和弘の親との接点は今だに解明されない。
「もう一度、あのビルを調べよう」
和弘は翔と共に、あのビルに向かった。
そのビルはまた、人を寄せ付けぬ、暗い雰囲気を漂わせていた。
「翔。このビルで、お父さんらは封筒を持っていったんだよね？」
「あぁ。このビルは人目が付きにくそうだからな」

和弘はふと足元を見た。そこには、一つの煙草、吸い殻が落ちていた。
「あれ？煙草？」
和弘は手に取った。その煙草からは、灰がパラパラと溢れた。
「まだ新しいな」
翔も見ながら、そう言った。古い煙草なら、灰は風で飛んでいくだろう。つまり、この煙草は、吸われてまだ間もなく、吸った煙草を、そのまま地面に落としたのだろう。
「こんなのがまだいるんだな」
「あぁ。携帯用灰皿くらい持っとけよ」
和弘はその煙草を、近くのゴミ箱に捨てようとした。すると、不思議なことに気がついた。
「なぁ、ゴミ箱ってさ。普通、人がすぐに目につく場所にあるもんじゃない？」
「まぁな。普通、そうじゃないと、分かりづらいだろう」
「じゃあさ、こんな、雑草の真ん中に置いてあるの？」
そう。何故かそのゴミ箱は雑草の這え伸びた、横の庭にほったらかしになっていたのだった。
「ほんとだ。変だよな」
「あぁ、しかもだ」
このゴミ箱の少し先、そこには何かを建てていたと思われている、跡があった。ゴミ箱をそこに持っていくと、ぴったりとはまった。
「ここに元々はあったんだ！」
「あぁ、通路の途中だな」
通路の両側にある庭は、雑草だらけだ。しかし、このゴミ箱は明らかに不自然だ。それに、よく見ると、
「あれ？凹んでる」
このゴミ箱はなぜか凹んでいた。明らかに人為的なものだった。
「なんか、怪しいものばかりだな」
すこし変なものばかりが目につくなか、後ろから不意に声がした。

「お主ら、何もんじゃ？」
「うぎゃぁぁぁぁぁ！」

「お主ら、そこまでびっくりせんでも」
「急に喋りかけないで下さいよ」
翔と和弘は心臓をドギマギさせながら言った。
「ワシはここの管理人じゃぞ？」
管理人。思わぬ人物が現れた。絶対についてる。
「あぁっ。管理人さん。聞きたいことがあるんです。このビルは、いったい何ですか？」
「あぁ。これはな、昔、会社だったところじゃ。バスの会社じゃったな」
「バス会社？」
二人は同時に聞き返した。
「そうじゃ。ここの庭は本来バスが置いてあったんじゃ。しかし、バスは数台しかなかったうえ、あまり経営もよろしくなかったんじゃな。とっくに大きなバス会社に併合されてしまった。ワシはこのバス会社の先代社長であり、創始者じゃった。だから、ワシはここを買い取ったのじゃ」
「そうだったんですか」
「あと、ここに十日ほど前に、数人いませんでした？」
「あぁ。十日前か。確か、数人がいたな。ワシはそのとき、草刈りをしてたのじゃ」
「そのときのことを詳しく、教えてもらえませんか？」「あぁ。それは、昼間のころだった。急に二人の大人がやって来た。男性と女性で、何か封筒を持っていた。結構大きな封筒だった。彼らは扉を開けて、奥に入っていった。重苦しい雰囲気が漂っていた。後に、男性たちが入ってきた。彼らは柄が悪そうで、とても人数が多かった」
翔はある疑問が沸き上がった。

「あれ？どっかの会社の社長が入ってきたんじゃないんですか？」
「いや。全くそんなことはなかった。ただの暴力団のような様子だった。どうしてそんなことを聞きたがるのかね？」
「いや。大したことはないんですけどね…」
翔の情報に矛盾ができた。今までこんなことはなかったので、翔は愕然とした。いったいどこに間違いがあったのか。分からないが、とりあえず今はこの情報をうまく使うしかない。
「ありがとうございました」
二人はお礼をいって、その場を立ち去った。

第六章

翔は帰り際、いつもの友達の場所へ行った。そこはいつも翔の情報源になっている場所だ。その場所から話し声が聞こえた。
「でさぁ、翔がよぉ、話しに来たから、嘘ついてやったらよ、あいつ、マジで信じやがんの」
「あぁ、分かる。俺は聞かれてねぇけど、あいつ、俺らに馴れ馴れしいからな」
「まだまだ、中学生のお子さまが、俺らとつるむなんて、百年早いんだっつうの！」
容赦ない悪口が聞こえた。薄々感じていた。時々、自分が何か、邪魔者扱いされているような気もしていた。しかし、あえて感じないようにしていた。だが、もう限界だ。
「なんだってんだよ！」
翔はメモを叩きつけ、彼らを睨みつけた。
「あぁん？」
彼らは一斉に翔を見た。噛んでいたガムや、口に加えた煙草を捨てた彼らは、金属バットを持ち、翔に近づいた。
「おいおい。俺たちの談笑を邪魔すんじゃねぇよ」
一人が翔の肩に手をおき、小さい子をなだめるように言った。翔は睨みつけた。
「おー怖い怖い！」
手をおいた人は、そう言って手を離した。
「なんだよ。文句あんのか？」
一発、翔の顔に拳を打ち付けた。その後、
「やっちまえ！」
一人の声で、数人の高校生から大人が、翔に暴行を加え始めた。翔は反抗するわけでもなく、ただこう言い続けた。
「騙しやがって！騙しやがって！騙しやがってぇぇぇぇ！」

翔はそう言い放ったが、一人に襟を捕まれた。
「はぁ？騙しやがっただと？なに寝ぼけたことぬかしてんだ？俺はお前を信用しちゃいねぇ。事実を言って、どこに流れていくか分かったもんじゃねえのに、わざわざ墓穴を掘るようなこと、するかってんだよ！」
あっさりと言われ、翔は力が抜けた。ずっと騙されていたのだ。最後の一発を放たれて、翔は地面に倒れた。その、朦朧とした意識の中で、彼らが言った。
「そうだ。焼き肉でも行こうぜ」
「いいな。真の仲間結成に！」
「でもどうやってそんな金が手に入ったよ？」
「あぁ。知り合いが暴力団に関連しててよ。十日ばかり前に、ある家族から膨大な金を取れたから、金があまりまくってんだって」
その辺りで、頭がぼやっとして、視界が暗くなった。数時間ほど倒れていたのか、
「君、君！大丈夫かい？」
一人の大人が、翔を目覚めさせた。翔はふらふらしながらも、和弘たちがいる家へと向かった。
和弘はすでに家へ帰っていた。
「翔のやつ。遅いなぁ」
「大丈夫よ。すぐに帰ってくるわ」
由希は和弘を落ち着かせるように言った。だが、和弘は翔を待ちくたびれた。
「もう、我慢の限界だ！探してくる！」
「へぇっ？ちょ、ちょっとぉ、和弘！待ちなって！」
由希が止めるのを聞かず、そのまま飛び出してしまった。
翔はクラクラとしながら、歩道を歩いていた。彼らの暴行で視界が聞かず、焦点が未だにあっていない。ふと翔の目の前に見覚えのある顔が現れた。こんな視界でも分かる。その名は、
「た、つ…あ、き…」

そう言って、視界が途切れた。次に目を覚まして見たのは、「飯田達明」という、少し深い訳のある同級生だ。彼は引きこもりのため、本来はこんな日にあんな所にいる訳はない。
「ど、どうしてだ？」
翔は聞いた。
「うん。何か、胸騒ぎというか、何か外でふらふらの人がいたから、どうしたのかと思って行ったら、君だったんだ」
達明は髪を掻きながら照れ臭そうに言った。しかし、翔は大事なようがある。達明に礼を言い、すぐに家へと走った。
和弘と出くわしたのは、それから、わずか五分後。家に帰って事情を話した。
「だから、情報の中で、若干、違うのも含まれているんだ」
「じゃあ、何が合っている？」
どうやら、間違いなさそうなものは、和弘の父や母が封筒を持って中に入ったことのみだった。
「だがな。僕も頑張って調べたらね。親戚の中で借金をした人が逃亡したっていうのも、本当らしいよ。でも、いまだに連絡を取っているんだっていう人もいるし、もう無理だっていう人もいるんだって」
やはり、和弘の情報も宛にならない。だが、これで分かったのは、今野家にあるトラブルは、暴力団の関連だろう。すぐにそこを調べた。ここは翔の専売特許。なかなかの量の情報が手に入ったらしい。
「そいつらの名前は、部羅都苦反（ブラックハンド）怒っていう、結構有名な暴力団で、サラ金関係もやってるらしい。あまり、評判がよくなくて、あまり関わらない方が、身のためらしい」
今回の情報は間違いなさそうだ。色々なところで情報を取っているため、間違った情報は低い確率でありえない。そして、その情報を合わせた結果、このようになったのだ。さぁ、ここから、和弘の推理がスタートする

第六章（後書き）

ようやく、推理小説らしく、推理が始まります。

第七章

和弘は翔と由希に言った。
「うぅん。繋がらないなぁ」
「あぁ。そうだなぁ」
和弘の親戚の今野茂明は、確かに借金をしていた。そして、いつか消息を経っていた。だが、和弘の両親は、なぜか同じ暴力団に被害にあっていた。その理由が分からず、悩んでいた。
「なぁ。もう調べることは出来ないのか？」
「あぁ。もうほとんどの情報源を使い果たしたからな」
情報がかぎりなくあるわけでもない。どうしようかと悩んでいると、さっきまで、香織の世話をしていた、由希が言った。
「ねぇ、その暴力団の、本拠地はないの？」
「あぁ。すこし電車で移動すれば、すぐに見つかると思うけど」
由希はしばらく考えて、ある提案をした。
「じゃあさ。おとり作戦は？」
二人は一斉に由希を見た。驚きのあまり、言葉も出なかった。
「だめだよ…そんな作戦…」
和弘は力なく否定した。これは、最も和弘が嫌だった方法だった。しかし、背に腹は変えられないと思っている自分もいた。
どうやら、この作戦はひとり、おとりを使って、いろんなことを聞き出し、逃走して警察に連絡するという、あまりにも危険すぎる作戦だ。
「相手は暴力団だからなぁ。いったい何してくるのか、分かったものじゃない！」
翔は否定したが、由希の強い意思に変化はなかった。
「じゃあ、あなたたちはやらなければいいわ。私一人でやればいいのよ」
由希は一人でもやるつもりだ。

（もう、止められない）
そう思った和弘は、由希に言い聞かせた。
「だったら。重要なことだけを、聞き出してこい。無駄な闘争心をかきたたせないようにして、ダメだって思ったら、すぐに逃げてくるんだ。いいな？」
今は由希に任せるしかない。そう思ったのだ。しかし、翔は猛反対した。
「ダメだろ！危ない！和弘！どうかしちまったのか？こんなことを由希に任せる気かよ！正気か！しっかりしろよ！」
由希の力強い発言を、ただひたすら、危ないと翔は言い続けた。
「だったら、翔。何か作戦はあるか？これなら、絶対に大丈夫だっていう作戦があるのか？」
翔には答えられなかった。
「ありがとう。和弘」
由希は支度を始めた。
服装はいつもしているのと変わらない。女の子らしい服装だ。そして、小さな手提げ鞄。中には財布と地図が入れた。
「和弘。こんなもの、いれてどうするの？」
入れたのは、由希ではなく、和弘だった。
「あぁ。今から由希には、『部羅都苦反怒』の本拠地に行ってもらうよ。本拠地で怪しい行動はしてほしくないから、この地図を持って歩くんだ。そしたら、多少の言い訳にあるはずだよ。まぁ。何でもいいから。気を付けて帰ってきてくれよ」
和弘は心からそれを願った。もしも彼らに捕まって、怪しまれて消されるようなことでもあったら、和弘はきっと、この世の中には、居られなくなってしまうであろう。

第八章

由希はひたすら歩いていた。いつも「部羅都苦反怒」がうろついている、ある行き止まりに向かっていた。だが、そこに真っ直ぐ行くのではない。向かう場所は行き止まりのすぐ近くにある、「祖母の家」だ。本当は祖母の家なぞない。つまりこれが言い訳だ。

翔は三つ目の曲がり角を左に行けば、もうその行き止まりは真っ直ぐ行くだけだと行っていた。そして、すでに曲がり角は三つ目。ここを左に曲がれば、部羅都苦反怒に行ける。彼らのアジドには基本入ることは許されない。そのため、恐ろしく危険な目に合う恐れもある。言わば、賭けに出たのだ。由希は大きな一歩を踏み、アジドに入った、地図を見ながら、蜘蛛の巣もある、僅かしかないスペースを通っていた。彼らの話し声が聞こえてきた。やがて、彼らの姿が見えた。

彼らも由希の姿が見えた。全員が冷たい目で、由希を見た。

「あれ？」

由希は辺りを見渡した。

「曲がるかどを間違えたのかな？」

由希は地図を見ながら確かめた。

「あっ！もう一つ先の曲がり角だった。あ、皆さん、失礼しました」

逃げるように由希が立ち去ろうとした、そのときだった。

「おい！待てよ」

背筋も凍るような、冷たい声が聞こえた。

「な、なんで、しょうか？」

すこし、肩を震わせながら、由希は振り返った。

「お嬢ちゃん。いったい、ここがどういう場所か、知ってるかい？」

一人の男が、まるで小さい子供に言うような口調で言った。

「え、えぇっとぉ。あ、あの、その…」

由希は言葉が出てこないふりをした。

「ここは！あの、部羅都苦反怒のシャバさ！てめえのような、お子さまが来るような場所じゃねぇ！」
男は怒鳴った。
「え…え…あっ…あ、あ、あの…部羅都苦反怒？」
「そうさ！こんなとこに来てしまったんだ。ただで済むとは思うなよ？お嬢ちゃん。結構かわいいしなぁ。俺たちの玩具にでも、なってもらおうかなぁ？」
いつのまにか、全員に囲まれていた。男たちは輪を作り、ゆっくりと縮めていく。輪は小さくなり、やがて由希にくっつく。大変だ。
由希は防犯ブザーに手をつけ、思いっきり引っ張った。
「ピピピピピピピピ」
大きな音が鳴り響いた。しかし、男たちは動揺しない。なにか秘策があるのか。
「残念だったなぁ。今からここは地下に繋がって、音一つ漏れなくなっちまうんだ。警察を呼ぶこともできねぇぜ」
そういうと、一人がなにかスイッチを押した。すると、地面が揺れる。その音と共に、地面が落ちていく感覚にあった。元々いた場所より、地下にだんだんと移っていき、気がつけば二メートル近く下がっていた。やがて、天井は塞がれていった。
行き止まりだったそこは、地下のアジトへと変わっていた。どうやら、地下のアジトは広く、ここはその一室になっていた。
「手の込んだしかけね」
由希が言うと、男たちもそれに同意するかのようにいった。
「あぁ。全くだ。このおかげで、俺たちは何やっても捕まっちゃいねぇのさ」
一人の男が言った。
「その仲間に、お前もなれるんだぜ。感謝しろよ」
また一人、男が言った。
「馬鹿にしないで！誰があんたたちの仲間になるのよ！」
「まぁまぁ、そう怒るなよ。そのうち、お前の方から、仲間になら

せてくださいとお願いするようになるからよ」
そういうと、男たちは由希を拘束させ、この部屋に閉じ込め、扉を閉めてしまった。
由希は何とかして、拘束を破ろうとしたが、無駄なあがきに終わった。扉も向こう側から鍵をかけられたようで、開くことは一切なかった。由希の体は、背中に手錠をかけられており、足にもおなじように縛られていた。首輪もつけられ、惨めな状態になっていた。
「どうしよう。このままじゃ、私、どうなっちゃうの！？」
答えてくれるはずのない扉に、その問いを投げかけた。部屋でその声は反射して、跳ね返ってきた。そのまま、由希は眠ってしまった。

第九章

「おい！起きろよ！」
由希の目が覚めたのは、男の声と、体に走る苦痛からだった。どうやら、由希は手足を大の字にされ、拘束されているようだった。由希はその状態に軽いパニックを起こしてしまった。いくら拘束器具をガチャガチャと動かしたところで、どうにかなるわけでもない。だんだん状況が飲み込めてきたのか、その抵抗もなくなってきた。
「よし。じゃあ、今から、君の取り調べを行う」
どうやら、この男たちは、由希の正体を調べたいらしかった。
「始めに聞こうか。お前の名は？」
「松野由希」
「あと、年齢と住所を教えな」
「え？どうしても言わなくてはダメですか？」
少し男の顔を見た。男の目付きは鋭く、由希は背筋がぞっとなり、冷や汗が流れた。
「えっと、十三歳で、住所が、あの、その、☆●区の★丁目です…」
ここで嘘を述べれば、いったいどんな目に遭うか、分かったものではない。そこはしっかりと事実を述べたが、一つ、絶対に答えてはならない、質問もあった。何回か質問があり、その後についに、その質問が出た。
「えっとな。なぜお前は俺たち、部羅都苦反怒のとこに侵入してきたんだ？」
この質問には答えることはできなかった。本当は祖父の家に行こうとしたという理由もある。だが、いつかはその嘘がばれてしまうかもしれない。そのため、由希はあまり言いたくなかったのだった。
「どうしても、言わねぇつもりみたいだなぁ。よし。やっちまえ！」
何をするつもりなのか、数人の男たちが立ち去った。しかし、数分の間に彼らは戻ってきた。男たちの手には、スイッチを持っていた。

いったいどうするのか、男はためらいなく、そのボタンを押した。

ビビビビビビビビ

身体中に衝撃が走った。髪の毛や全身の体毛が、逆立っていくのが分かった。指の先が痺れ、感覚が麻痺をしていく。あまりの衝撃にほとんど声も出なくなっていた。

「……っあ……っあぁ……」

わずかなこの声も、本来なら、かなりの大声を出しているつもりだったのだ。数分ばかり衝撃は続いた。

「言わねぇと、次は倍の電圧を流し込んでやる」

さっきのであの衝撃だ。いったい、倍なんて量を流されたら、いったいどうなってしまうのだろうか。これは身体が持ちそうにもない。言うことを聞くしかなさそうだった。

「おばあちゃんの家に、遊びに行こうとしてました」

「よし。言ったな」

男の一人は、由希の言った言葉をメモしていた。恐らく、由希の正体を調べておこうとしているのだろう。

「じゃあ、お前のおばあさんの名前はなんだ？」

「松野じゅん子。ここの隣の家だわ」

「くっくっく。そうか。間違えてこんなとこに入っちまったのか」

「そうよ…」

由希は男に苦し紛れでそういった。しかし、男の反応は

「ふざけんな！隣の家はすでに売家だっつうの！」

驚きだった。まさか、隣は適当に考えた、だが、まさか売家だとは。大変だ。何か修正しないと。

「間違えたわ。もう一つとなりだったかも」

「くそやろう！隣はビルだっつうの！てめぇ！嘘つきやがったなぁ！」

もう終わりだ。この計画は失敗してしまった。

ズギャャャャン

由希の体に電気が流れ、まもなく気絶した。

第十章

和弘と翔は、由希の帰りを待っていたが、すでに日が落ちそうになっていた。
「あ～っ！遅い！」
「本当にまずいんじゃないのか？」
「捕まっちゃったのかな？」
「だったら大変だよ！」
「でも、ただ遅いだけかも」
「由希。本当に無事かなぁ？」
和弘も翔も由希を待ち続けた。気がつくと辺りは暗く、すっかり夜になっていた。
「わりぃ。翔。俺、やっぱ行ってくる」
「え？本当か？もう外真っ暗だぜ？」
「由希のことが心配だ」
「だったら俺も行く！」
「香織は？香織はどうするんだよ！」
「か、香織ちゃんは…」
「悪いが、香織の面倒、見てやってくれ。頼む！」
「……分かった。だがな。約束だ。由希を元気なまま、連れて帰ってこいよ！なんかあったら、お前とは絶交だからな！」
「お前は親か！…でも、約束だ。絶対に連れて帰ってくる！」
和弘はそういうと、勢いよく家を飛び出した。なんとしても、由希を連れて帰らなくてはいけない。
いつから気絶していたのか。起きると男たちはほとんど眠っていた。恐らく今は深夜なのだろう。拘束器具はいくらやっても外れない。そのため逃げることはできない。なんとかして、ここから脱出したいのに。男たちが眠っている間に、なにかできないかと考えた。どれだけ考えても、いい案は浮かばなかった。すると一人の男がゆっ

くりと立ち上がり、由希の方に近づいてきた。思わず、由希はその男から目をそらした。近づいて、何をするかと知れたものじゃない。男は由希のすぐ近くまで来た。すると、男は小声で由希にささやいた。

「大丈夫かい？」

一瞬耳を疑ったが、この男が言ったのに間違いはなさそうだ。

「あ、あなたは、何者ですか？」

「それは後で説明する。由希さん。今すぐここから出よう」

「出ようって言われても、こんなんじゃ、無理ですよ」

「大丈夫だ。この拘束を取る鍵を持ってるから」

すると、由希の顔にちらつかせた。どうやら本当らしい。この男は由希の拘束を取ると、手を引っ張り、逃げ出した。

やってきたのは、どこかの公園。すでに日は沈んでいたため、街灯が一つあるだけの、暗い公園。

「ここなら誰にもばれず、二人で話ができるな」

そういいながら、その男は腰を下ろした。由希もそれを見習った。

「じゃあ、まずは自己紹介しなくちゃな。僕は源駿人。君は、松野由希ちゃんでいいのかな？」

「はい」

どうやらこの男は「みなもとしゅんと」と言うらしい。しかし、彼が一体何者か。彼に由希は質問した。

「あなたは、どうして私を助けてくれたのですか？」

「あぁ。それはね。僕は部羅都苦反土の人間じゃないからなんだ」

「え？だったら、あなたは一体？」

そういうと、男はポケットに手を突っ込み、ものを探した。由希には何をしているかは見えなかったが、この男がやっていることは、由希に安心を与えた。

（どうやら、悪い人ではないみたいね）

男はやっと探し終え、由希にそれを見せた。それは手帳のようなもので、金色の紋章が見えた。

「これって？」
「そう。警察手帳だよ。本当はね、僕は警察官なんだ。部羅都苦反土は最近、何やら悪い噂がたっているからね。潜入調査をしているんだ」
「悪い噂って、何ですか？」
「どうやら、テロをたくらんでいるようなんだ」
「どういうことなんですか？」
「どうやら、今度、ある国の国会に爆弾をしかけて、爆発させるつもりらしい」
「それは危険じゃないですか！」
「あぁ。だから、潜入調査をして、隙を見て、全員を逮捕するんだ」
「へぇ。でも、どうして私は捕まったんですか？」
「どうやら、あのときはその爆弾の計画を立てていたときらしかったんだ。だから、君が現れたときに聞かれたって思ったんじゃないか？だから、すこし強めに言ったんじゃないかと思うよ」
彼はそう言った。由希はなるほどと理解したようだった。
「でも。無事だったかい？君、かなりの電圧を受けたじゃないか。普通ただじゃすまないけどね」
「まぁ。何とか無事なんです」
由希はそう答えたが、本当は体が痺れ、感覚がない状態だった。
「それにしても、君はどうして、こんなところに来たの？」
「え？何でですか？」
「君は、おばあさんのお家へ行こうとして、間違えてこの中に来てしまったって行ってたよね？」
「そ、そうですけど？」
「君、そのとき、どの方向を向いてた？」
「ほ、方向ですか？」
由希はその変わった質問に驚いた。向いていた方向で何か、違いが分かるのだろうか？
「君は、左上の方向に、目が一瞬動いた。それは、人間が嘘をつい

たときの、無意識に起きる反応なんだ。つまり、君はあのとき、嘘をついていた」
「！！！」
驚きで声も出なかった。まさか、分かってしまう人がいたとは。だが、彼は警察。彼になら、打ち明けられるかも知れない。
「駿人さん。あなたにお話ししたいことがあります」
「どうしたんだい？急に改まって」
「私、確かに嘘をついてました。でも、それには、深い訳がありまして…」
由希は全てを話した。和弘や、親の話、そして親戚のことも。すべて全部だ。
「そうか。そうだったのか。君、あの人の子の、友人、いや、親友だったのか…」
駿人は上を見て言った。明らかに、何らかを知っている様子だった。
「今野茂明さん。よく覚えてるよ。確か、もう十年も前になるんだったかな。僕も、部羅都苦反土の潜入を命じられたのも、この年だった。当時、部羅都苦反土はサラ金の貸し出しも行っていてね。今も行われているんだけど。そのサラ金を借りに来てたんだよね。確か、一千万くらい借りてたんだ。その一千万はやがて一億くらいになった。もう無理だと、彼は自己破産したんだ。でも、部羅都苦反土としては、返してもらいたいわけだ。だから、家に押し入ったりしていたらしい。でもね。彼が突然、夜逃げをしたんだ。たぶん、そうすれば大丈夫だと思ったんだろうね。でもね。無駄だったんだよ。彼はね。やつらの火に油を注いでしまったんだ。そして、彼は…」
言われなくても、その次の言葉は分かっていた。だが、由希は黙った。
「それで、和弘の両親は、いったい何の関係があるのですか？」
駿人は黙った。辛い思いがあるのだろうか。しかし、聞いておかないといけない。和弘のために。

「あぁ。彼らはね。つい最近、今野茂明さんの親戚って分かったから、ターゲットになってしまったんだ。あの後、今野茂明さんの親戚を探してたらしいんだ。残った借金を返してもらおうとして。やがて、その二人が見つかった。最初は金を取るために行っていたんだけど、やがては他のことに手を出し始めた。由希ちゃんが言っていた、封筒はお金の封筒だよ。きっとその中に一億のお金とまではいかないまでも、そこそこのお金を持っていたんだと思う。でも、その後は何か召し使いのようなことをやらされているみたいだよ」
これで、二つの事件が繋がった。
「和弘に伝えなくちゃ」
「そうだね…。友達にしっかりと教えてあげなくちゃね。でも……無駄だよ……」
駿人は詰まりながらも、そう言った。
「え？どうして？」
由希は警戒もせず、駿人を見た。
「さっきまでの話を全部、テープレコーダーに録音させてもらったよ。全く、子供は単純だよなぁ。そんなに簡単に信じちゃうんだからなぁ。おもしろいぜ」
さっきとは全く違う口調で話した。目付きまで変わり、殺気さえ覚えるほどだった。
「な、なんですか？あなたは？」
「俺か？お前、部羅都苦反土がどんな組織かしってんのか？ん？」
由希は固まった。怖い。そんな言葉が頭を過る。
「残念だったなぁ。俺はお前の味方ではないんだよ！」
由希に思いっきり、蹴ってかかった。首に足が直撃した。由希は吹き飛び、気を失った。

第十章（後書き）

ここに出てくる、「源駿人」は、作者の「源しゅんと」とは全く関係ありません。僕こんな悪いやつじゃないし。

第十一章

真っ暗な闇で視界が効かない。光一つない空間に、由希は閉じ込められていた。どうやら、手を前から拘束されているらしく、手を自由に動かせられない。しかし、何とか手探りで確認すると、どうやら、鉄の柵で囲われているような感じだった。肌寒さに凍えていると、急にライトがついた。いきなりのことで眩しかったが、そのとき、初めて自分の状態に気がついた。由希は捉えられ、牢屋の中に放りこまれていた。中央に通り道があり、その右と左の両脇に、牢屋が何個もあるのが見てとれた。ここが牢屋だと分かると、すぐそばの牢屋の中を見た。

（もしかしたら…）

由希の考えは正しかった。どうやらここは、四人で一組らしく、どの牢屋にも四人が入っていた。自分の牢屋にも、当然、四人入っていたが、由希はその人の顔に驚いた。二人は由希もよく、知っている人物に似ていた。向こうもそれに気がついたのか、こう言った。

「由希ちゃん……？」

「おばさん？おじさん？」

三人が一丸となって探していた人が、そこにはいた。

「どうして由希ちゃんがこんなとこに？」

「あなたたち二人をずっと探していたんですよ。和弘や翔と一緒に」

「和弘、あの子ったら」

母は涙を流した。しかし、父にはまだ疑問が残っていた。

「じゃあ、どうして君が捕まってるんだ？」

由希はことの次第を全て話した。

「そうか。それは迷惑をかけたね。今、ここの脱獄の計画が立てられているんだ。間もなく完成するから。由希ちゃん。一緒に和弘のところへ帰ろう！」

「はい！」

由希も計画に加わり、準備が進められた。
部羅都苦反土の本拠の前に、和弘はいた。もう辺りは暗く、あまり見えなかったが、見張りが彷徨いているのは分かった。その見張りの目を上手に避け、中に入ることができた。和弘は中を見渡した。見渡すかぎりでは、どこにいるのか分からなかった。歩いてくる幹部を、上手に避けて、やはり、いろんな場所を探し回ったが、どこにも由希は見つからなかった。
「どこだよ。由希…まさか、本当に殺されたのかよ」
しかし、首を振った。そんな縁起でもない。
由希たちは作戦を実行に写そうとしていた。作戦のことは、父が言っていた。
「俺たちは、毎日一日中ずっと仕事をさせられるんだ。その仕事場では、いつも見張りが三人ついてる。その見張りが、一つの場所に固まったときに、いっきに攻めるんだ。相手は三人、こっちは四十人はいるんだ。どう転んでも、こっちが勝つに決まってるさ」
父は相当な自信だった。
（これは、のってみる価値はありそうね）
由希はその案を一緒に実行することにした。
和弘は、徹底的に場所を調べていたが、どうにもならず、一旦出ることにした。しかし、危機的状況に陥っていた。廊下にいたところ、両側から、人がやってきた。絶対に部羅都苦反土の人間だ。それに挟み撃ちにあってしまったのだ。
（大ピンチだぁ！）
いそいで影に隠れたが、バレるのは時間の問題だろう。
「こっちは異常無しだ」
「こっちもだ」
「何か、さっきある影をみたんだがな」
「どんなだ？」
「人の影ではあるんだけど、隠れたんだよな。あそこに」
そう言って、和弘が隠れている場所を指差した。

「おぉっ。確かに、何か反応があるぞ」
サングラスに何か仕掛けがあるのか、男が言った。
「よし。確かめよう」
男たちは、二人がかりで、ゆっくりと回った。和弘はまずい事態へと直面した。
（やばいよ。これはまじで！）
和弘に様々な案が駆け巡り、ついに決めた。
男たちは和弘の姿を見て、にやっと笑った。
「おいおい。こんなところになんのようだい？にーちゃん？」
「いけないなぁ。勝手に入ってきちゃ！」
男はピストルを構えた。
「じゃあな。あばよ」
いきなりの射撃に慌てふためいたが、いまさらどうしようもない。
「おりゃあ！」
和弘は靴を投げた。靴は直線で男の顔に直撃した。
「よしっ。逃げよう」
走ろうと立ち上がった、その瞬間。
「ズキュン」
和弘の足に、赤く血が滴り落ちた。男の持つピストルからは、煙が出ていた。
「がはっ！」
和弘の体は大きく揺らめいた。
「ドキュン」
もう一発、腹に撃たれた。
「うがぁっ」
和弘は地面に倒れた。それを何度も蹴り飛ばす男たち。和弘の意識はすでに、朦朧としていた。やがて、暗くなった。

最終章

和弘が目を覚ました場所は、由希が閉じ込められている、あの牢屋だった。
「よかった。和弘。目が覚めたね」
由希は和弘のことをずっと心配してくれていたようだ。
「ゆ、由希？」
「そうよ。よかったわ。目が覚めて」
「ここは？」
「被害者が集まる牢屋よ」
「ってことは、母さんらも？」
「うん。一緒の牢屋に」
確かに辺りを見渡せば、すでに眠りについた、父母がいた。
「いててっ」
和弘は、痛みを帯びた場所に、手をやった。すると、その場所に包帯が巻かれていた。
「あれ？この包帯は？」
「私の服。ちょこっとずつ、破いて作ったのよ」
確かに由希の服は破れていた。
「ありがとう。由希。お父さん。お母さん」
和弘は三人に礼を言って、眠りについた。
次の日から、和弘、由希の初めての強制労働が始まった。強制労働はかなりきつい。いや、きついなどと言うものではなかった。少しでもサボろうものなら、体がボロボロになるまで、痛めつけられた。
「いったいいつになったら固まるんだろ？」
「さぁ？でもあんまり喋らない方が良いわよ」
由希と和弘は何とか連絡を取っていた。そして、ついにチャンスが訪れた。次の指令を出すために、三人の監視が固まっていた。
「いまだ！みんないくぞー」

和弘の父の言葉と共に、三十人ほどが、監視に殴りかかった。多勢に無勢で、監視はこっぴどくやられ、ついに監獄からの脱出が開始された。どうやら、道を知ってるものもいるため、スムーズに外へ出れた。だが、想定外の出来事が起きた。監視カメラのことを忘れていたため、写ってしまっていたのだ。すぐに応援が駆けつけ、取り囲まれた。そこには、一人幹部らしき人物も混じっていた。
「逃げようとするとは、君たちは不器用な人間だな。今ここで働いていた方が、外で辛い人生を送るよりずっとましなのに。ちなみに、何も悪いことをしてない人も、工作員の力で、悪事を働いたことになってるから。やめといた方がいいぜ」
男は諭すように言った。だが、誰も引くものはいなかった。
「ふぅ。じゃあしかたない。消えてもらおう！」
その言葉と同時に、周囲にいた一人の男性が、銃のトリガーを引いた。ところが、由希はその人の顔に、見覚えがあった。
「あっ！あんたは！」
そうだ。公園に連れていかれ、由希の真実を話させて、牢屋に送り込んだ、張本人だった。向こうも由希に気がついたようで、少し目を反らした。
「どうした。早く消せ！」
彼は引き金を引いた。
「パァァァァァァァァン」
ピストルの乾いた音が響いて、一人が倒れた。
「な…！？」
男性は驚きの表情を見せて倒れた。それもそのはずだ。逃げた和弘らを撃つかと思うと、くるっと回り、いきなり見方に撃ったのだから。
「ん……！？」
その状態に、由希も和弘も、驚きを隠せなかった。
「あ、あなた。どうして？」
「どうせ君は、僕を裏切り者だと思ってるだろう。別にそれでもい

いさ。僕、嫌われてるのは慣れているからね。だから別に、ただの仲間割れだよ。これは」
源駿人と名乗った、その男は、由希に向かってそう言った。
「ふはははは！きさまぁ。ついにやってくれたなぁ。でも、この俺は、きさまが何かやらかすことは、すでに予測していたよ。残念だったなぁ。消えてもらおう。スパイさん」
駿人はついに囲まれた。絶対絶命のピンチだった。全員がピストルを構えて、撃たれそうなはめになった。
「くそっ。あの人もピンチになったじゃんか」
「で、でもっ」
由希には、いまいち信用が出来ずにいた。
「でも、せっかく助けてくれたのに、見殺しにするわけには行かないよ」
「でもっ。また、また裏切られるかも。そんなの、私嫌だよ！」
「だけど、こんな状況で逃げ出せても、全く嬉しくないよ！」
由希は和弘の情熱に押されかけていた。
「わ、私、もう、信じられない。あの人は一度、私を裏切ったんだもん。わ、私は…」
涙が溢れた。どうしてか分からないが。やがて、嗚咽にも変わっていった。
「だってぇ……ううっ…うぇっ…何も間違って……ないよぉ…うぅぅ。うわぁぁぁぁ」
ついに大泣きに変わった。辛かったのを、今洗い流すかのように、大声で泣き続けていた。
和弘はそんな由希に涙を見せた。
「辛かったな。さみしかったな」
「そんなの…。慰めになってないよぉ…」
涙ながらに、由希は答えた。
すると、和弘は由希を抱き締めた。強く、強く。初めは由希も混乱したが、次第にことが分かりはじめた。

「和弘…。ありがとう」
しばらく、和弘の温かさに浸っていた。
駿人はその姿を見たあと、こう言った。
「さぁ。消すなら消せ！早く！」
「ようやく決心がついたようだな。じゃあな。スパイさん」
全員が引き金を引こうとしたとき、
「やめろぉぉぉぉ」
和弘は力をこめ、殴りにかかった。軽くあしらわれたが、何度も立ち上がり、殴りにかかる。また、あしらわれ、再びあしらわれる。
もう一度、もう一度。また。また。何回も。何回も。
「しつけぇな！」
顔に直撃し、吹っ飛んだ。よろよろと和弘は立ち上がった。すると、
「めんどくせぇ。こいつから先に始末してやる」
男が銃口を和弘に向けた。

やばい

「あばよ！」

バン！

銃から放たれた弾丸が、腹を貫いた。
「しゅ、駿人さん！」
駿人は腹を押さえて倒れた。
「駿人さん。しっかりして！駿人さん！駿人さん！」
由希が駿人に声をかけた。というより、叫んだ。
「しゅ、駿人さん。しっかりして！お願い！死なないで！」
「ゆ、由希さん。ぼ、僕は、嘘をついてはいないんだ…」
駿人は、震える手で警察手帳を見せた。
「これがどうかしたんですか？」

「それはな、本物なんだ…。ついさっき、君の友達が通報をしてくれたらしい。ここに来るのも、時間の問題だろう…。よかったな…」
由希はよく分からなかった。ただ、源駿人は裏切り者だったが、内乱を起こして、身を呈して守っただけだと思っていたのに。なぜか違う感情が生まれた。そんなことではない。そんな感情だ。
だんだん外が騒がしくなり、
「動くな！警察だ！」
警察が突入し、助けてくれた。

次の日、由希と和弘は、駿人の病院に出掛けた。どうやら、腹を撃たれただけだったので、たいした重症にならずにすんだらしい。
「失礼します」
病室には一人部屋で、テレビを見ていた、駿人がいた。
「あぁっ。由希ちゃんと、お友だち、入ってよ」
駿人は手招きして、病室に招き入れた。
「さっそくですけど、昨日の続きをお願いします」
「あぁ。あのときのか。たしかね」

どうやら、彼が持っていた、警察手帳は、本物のもので、潜入調査をしていたのも、本当だったようだ。駿人が潜入調査をしているのは、今野茂明を最後に守れなかったからだ。茂明のようなものを守るのが仕事なのに、守れなかった。そんな自分の無力感のために、部羅都苦反土の崩壊をさせようとしたのだ。
「実はな。僕の父も、同じようにして、危険な目にあったんだ」
彼もまた、大変な目にあったのだ。
「私、あなたみたいな警察官になりたいです」
「俺も」
和弘と由希がそう言った。
再び、家族での平和な時間がやって来た。そして、この愛は欠ける

ことはないだろう。何年たっても、何年たっても。

最終章（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1460r/

親がいない

2011年3月25日10時08分発行